老人の社会的活動と余暇利用に関する研究

大間知千代

目次

まえがき
第一
Ⅰ 研究の目的
Ⅱ 実態調査項目
Ⅲ 調査の時
Ⅳ 調査の方法
イ 調査地
ロ 調査地選定の理由
ハ 調査地域の細区分と調査対象者
1 東京都
2 千葉市
3 名古屋市
4 四日市市
5 トップクラス
Ⅴ 調査の結果
1 健康
2 住居、居住形態
3 学歴
4 職業
5 生活保障
6 老人の役割
7 人間関係
8 老人クラブ
9 生活時間
10 余暇時間
11 信仰する宗教
12 社会意識
第二 外国の老人がどのような社会的活動をなし、またどのように余暇を過し、自由時間を活用しているか
第三 有意義な価値ある社会的活動とは、また有意義な余暇利用とは如何なるものか

まえがき

産業の工業化と工業の発展のための技術革新に伴ってもたらされた社会構造や生活環境および社会意識の変化は、こんにち住民の生活をますますきびしいものにしている。そしてその皺よせが、社会的弱者である老人を、いっそう苦しめている。とくに近年、寿命の延長、出産率の低下、乳幼児死亡率の減少に因る老年人口の著しい増加と、若年人口の減少は、好むと好まざるとにかかわらず、老人が労働力の一部として生産活動に参加することを必要とし、老人の社会的存在価値の再認識を社会に要請している。

かくて、如何にして老人をその体力に応じて労働に向わせ、生産部門に参加させ、また如何にして彼等が過去に蓄積したゆたかな経験と知恵と、そして現在もてあましてさえいる十分な余暇とを、社会のために有意義に活用させるかがさし迫った当面の課題として問題となっている。

与えられた研究課題「老人の社会的活動と余暇利用に関する研究」は、まさに、こんにち、老人福祉のためにも最も有意義な研究の一つといってもいい過ぎではないであろう。

第一　I　研究の目的

一、わが国の老人が、どのような社会的活動をなし、またどのように余暇――自由時間を過しているかを検討するため、老人の生活実態調査を、なるべく多く、広い地域にわたって行なう。

二、老人に対する仕事の適性検査方式の研究ならびに適当な仕事（職業）に関する調査研究を行なう。

三、外国の老人が、どのような社会的活動をなし、またどのように余暇を過し、自由時間を活用しているかについて研究する。

四、有意義な、価値ある社会的活動とは、また有意義な余暇利用とは如何なるものかについて論及すること。

II　実態調査項目

老人の仕事、社会的役割、余暇の過し方のほか、その背景を知る基礎資料として、次の項目について、個別面接調査を行なった。

イ　健　康

ロ　住居―居住期間、出身地、居住形態

ハ　学　歴

ニ　職業―過去と現在の主な職業、勤労意欲社会的活動（階級別）

ホ　生活保障―生活費収入源、安心感の有無、こずかい

ヘ　人間関係、家族内の人間関係、子の老親に対する態度、子の扶養の問題

ト　友人、親友との人間関係

チ　生活時間、余暇活動、老人クラブ、社会集団

リ　宗教的信仰

ヌ　社会意識―幸福の条件

Ⅲ　調　査　の　時

昭和四十二年七月から十二月まで

Ⅳ　調査の方法

イ　調査地―東京都、千葉市、名古屋市および四日市市

ロ　調査地選定の理由

1　東京都　東京都は近代都市としては、最も代表的な都市である。この近代的過大都市における生活のきびしさは、社会的構造、生活態度、人間関係その他に影響するところ大きく、核家族化を促進させ、近隣や血縁間の人間関係をも、非人間的に冷たく、疎遠にしている。こうした環

境が親切さと暖かい心のこもった養護を要する老人には、きわめて不利で老人を疎外、孤立化させ、その生活を一層きびしく、不安にしている。

2　千葉市　千葉市は東京過大防止救済の衛星都市であり、同時に県都としての地方都である。とくに近年、製鉄工場（川崎製鉄）、その他の大工場の設営に伴い、隣接農村地帯の都市化が急速に進展し、社会意識や生活構造が急速に変化している。このような社会的条件のもとで老人はどのようであろうか。

3　名古屋市　名古屋市は人口、面積ともに大きく、六大都市の一つに数えられている。しかしながら、俗に「都会の田舎」といわれるように、住民の生活構造、社会意識に前近代性が多分に残存するので、東京とは対照的である。

4　四日市市　四日市市は従来、城下町であった桑名市のために「商人の町」として繁栄してきたところである。近年、中部臨海工業地帯の一環として石油コンビナートが設営せられるようになって以来、工業都市として一層発展する一方、排気ガス、煙害、その他住民の生活をおびやかすものが少なくない。

とくに抵抗力の弱い小児と老人の「ぜんそく」、呼吸器疾患、病気の不治を恨む老人の自殺などが新聞に報道せられ、最近とくに四日市市における公害の問題が社会的問題として注目せられてきた。ここでは京葉工業地帯の一環としての千葉市と対照して、老人の生活は如何であろうか。

ハ　調査地域の細分化と調査対象者

この四つの都市の中で、調査地域をさらに、

(イ)　工業地域

(ロ)　商業地域

(ハ)　住宅地域

(ニ)　団　地

の四種類に細分し、異質的なそれぞれの環境で老人がどのように生活しているかを調査した。

(1)　東京都　まず東京都における調査地域、調査対象者および調査方法について述べると、東京では、つぎの各地域で四五〇例を対象として個別面接調査を行なった。例外は工場地域葛飾の亀有地区老人クラブ員一六例と、青山第二都営住宅に住む青山ことぶき会の会員三一例計四七

例に調査票を郵送して記入を依頼したこと。残り四〇三例には、すべて個別面接して調査員が被調査者の答を記入した。

面接調査をする場合は、被調査者の居宅に戸別訪問することを原則としたが、東京の場合に限り、つぎのような老人クラブの会場を使った。すなわち、住宅地域で八〇例（世田谷代田老人クラブ八千代会会員と祖師ヶ谷の長生会の会員計八〇例）と、商業地域の一部池袋の寿楽会会員二〇例およびけやき団地の百年会会員三三例のほか荒川区の生活保護ケース五〇例計一七三例を居宅戸別訪問した。残り二二〇例は、老人クラブを調査の場所とし、クラブ開催の日時と場所をあらかじめ打合わせておき、調査員が会場に出向いた。

なお、調査票の回収については、つぎに表記したように対象者総数四五〇のうち、回収されたものは四一一、平均九一％の回収率である。これを地域別にみるとつぎのとおりである。

東京都　調査対象　四五〇例、回収　四一一（九一％）

(イ) 工業地域―荒川区と葛飾区

対象　一五〇例（クラブ員一〇〇、生保ケース五〇）

回収　一三五例（七四％）（クラブ員九八、生保ケース三七）

(ロ) 商業地域―千代田区、中央区、台東区、豊島区池袋

対象　一二〇例

回収　一一六例（九七％）

(ハ) 住宅地域―世田谷区代田と祖師ヶ谷

対象　八〇例

回収　六一例（七六％）

(ニ) 団地―ひばりが丘、久米川、久留米、けやき台、東久留米の各団地と青山第二都営住宅

対象　一〇〇例

回収　九九例（九九％）

（注一）　東京都における工業、商業地域の選定はつぎの方法によった。

昭和四〇年度国勢調査（国勢調査報告、第四巻、都道府県編、その一三、東京都）により（大分類）工場地域は製造業、商業地域は卸小売業の比率が高いものと考え、二三区別に各区総世帯数に対する製造業世帯の割合、卸小売業世帯の割合をつぎのように計算した。

$$\frac{\text{区製造業世帯数}}{\text{区総世帯数}}\times 100,\quad \frac{\text{区卸小売業世帯数}}{\text{区総世帯数}}\times 100$$

これによって工業地域（工場地域）は、

墨　田（一位　五一・五八％）

葛　飾（二位　四七・五八％）

足　立（三位　四四・六九％）

荒　川（四位　四四・五三％）

商業地域（商店地域）は

中　央（一位　五〇・八六％）

千代田（二位　四五・二七％）

台　東（三位　四〇・五五％）

港　（四位　三三・〇一％）

比率の高い順に上の四区を選んだが、交通の便などを考慮し、結局工業地域は荒川区と葛飾区、商業地域は千代田区と中央区と台東区これに加えて豊島区池袋を選んだ。

（注二）　東京都老人クラブ名

(イ)　工業地域―荒川区と葛飾区の老人クラブ

（荒川区）―七地区老友クラブ、三河島西老人クラブ、南千住老人クラブ、南千住長寿会、三河島長寿会、日暮里西長寿会、日暮里中央長寿

会、南町屋老人寿会

（葛飾区）―亀有地区老人クラブ

(ロ) 商業地域―千代田区、中央区、台東区、豊島区池袋

（千代田区）―神田公園地区長寿会、神保町地区長寿会、和泉橋菊寿会

（中央区）―一二三会、銀座寿老クラブ、寿楽会、互楽会、くれない会

（台東区）―台東区老友クラブ

（豊島区池袋）―寿楽会

(ハ) 住宅地域―世田谷区代田と祖師ヶ谷及び下記団地

(ニ) 団地―ひばりが丘久留米地区寿会、けやき台百年会、久米川明交会、久米川老人クラブ、東久留米、東久留米団地長寿会、青山第二都営住宅青山ことぶき会

(2) 千葉市　つぎに千葉市における調査地域、調査対象者および調査方法について述べると、千葉市では次の各地域で三〇〇例を対象として淑徳大学学生が戸別訪問して個別面接調査を行なった。

なお、調査票の回収については次に表記してあるように、対象者総例数三〇〇のうち、回収されたものは二一〇例、平均七〇％の回収率であった。四つの都市の回収率を比較すると千葉市における回収率が最も低く悪かった。その地域細区分別の回収率は次の通りである。

千葉市　調査対象三〇〇例　回収　二一〇例（七〇％）

(イ) 工業地域―南町一、二、三丁目（対象　四二例、回収　二四例（五七％））、今井町（対象　三五例、回収　二八例（八〇％））

平均回収率　六八％

(ロ) 商業地域―富士見町、本千葉

対象　五〇例

回収　二二例（六六％）

(ハ) 住宅地域―松ヶ丘町、本千葉

対象　五〇例

回収　四三例（八一％）

(ニ) 農業地域―大巌寺町

対象　七〇例

回収　五六例（八〇％）

(ホ) 生活保護ケース

対象　五二例

回収　三五例（六七％）

(3) 名古屋市　名古屋市における調査地域は、中村区の比較的狭い地域に集中して調査した。商業地域は、藤江町の老人クラブ第二豊寿会の会員三五例の居宅に戸別訪問し、面接調査した。住宅地域は、道下町と大秋町に五〇例ずつ計一〇〇例と中島町の中島町老人クラブ会員宅（一六例）に戸別訪問して調査した。

対象者の標本抽出は、中村区役所戸籍住民登録票の中から、道下町と大秋町の六〇歳以上老人の世帯（単独および同居）を書き抜き、無作為に抽出（五五例）した。回収は道下町大秋町でが一〇〇例（八一％）、中島町藤江町では五一例（九二％）であった。

なお、名古屋市においても、東京、千葉と比較するため生活保護世帯の調査を計画していたのであったが、中村福祉事務所に拒絶されて、被保護者の名簿が入手できず、実行できなかった。

(4) 四日市市　対象　一〇〇例、回収　九七例（九七％）

四日市市における調査地域、調査対象者および調査の方法は次のとおりである。

(イ) 工業地域――浜田町、南浜田、北浜田、江田、新正町、幸町、新庄町

対象　七二例

回収　七〇例（九七％）

(ロ) 住宅地域―新庄町、南浜田町、浜田町、幸町

対象　三八例

回収　二七例（九六％）

四日市市と千葉の二つの工業都市を比較対照していいうることは、同じ工業都市でも千葉の方が、急速な近代化が住民の社会意識生活態度近隣の人間関係の上に影響を与えている。その一つの例が調査票の回収率の上に見られる。

千葉市の工業地域の一部南町では回収率がきわめて低く、五七％であった。四日市市の工業地域では、回収率九七％を収めたのに対し、千葉の南町一、二、三丁目の工場街はわずか五七％の低率を示した。回収不能（四二例のうち一八例）の理由の内訳は転出先不明九例、在所不明三例、常時不在二例、死亡一例、重病者三例で、千葉の方が社会移動がはげしく、逆境で社会からの老人疎外度が高いことが示された。

今回のこの調査の一つの特異点は、上に述べた四つの都市の地域社会に住む一般老人の対照グループとして、大学教授およびそれに匹敵する学識経験のトップクラスにある六〇歳以上の男女を調査の対象としたことである。選定方法は、日本社会学会、日本社会福祉学会、日本老年学会の会員名簿および津田塾大学、日本女子大学同窓会名簿のうちから六〇例を対象者として抽出、調査票を郵送して依頼した。

このトップクラスを調査して意外に驚いたことの一つは、回収率が五二％という最低率であったことである。彼等の多くは常に調査者の立場にあり、調査される立場におかれたことは、おそらく稀であろうと考えられるのである。多くの人が多忙で質問に応ずる時間に余裕のなかったことも考えられるのである。いずれにしても、こうした実証資料が得られたことだけでも、この調査の価値は大きい。

なお、この調査をして発見したことの一つは、調査対象者の標本抽出のための基礎資料としての住民登録票は、区役所あるいは市役所に保管されている名簿は最新のものではない。出張所が転出入届を受付けてから、市役所、区役所に回送され、そこで訂正されるまでに約数ヵ月の日時が要る。従って、最新の住民登録簿を得るには転出入を直接扱う出張所（現場の役場）へいった方がより正確で最新のものが得られるということである。

このようにして、回収せられた調査票を分類集計したものが、七三頁にわたる添附の表である。その内訳は、

五つの対照群を％で比較した表a―一―七頁

東京都Ⅰ―一―六頁（実数）

千葉市Ⅳ―一―一八頁（実数）

名古屋市Ⅱ―一―一四頁（実数）

四日市市Ⅲ―一―一二頁（実数）

トップクラスⅤ―一―四頁（実数）

計　七三頁

第一表から第三二表にわたる表の標題は、表の目次に示されてあるように、健康（第一～三表）、住居と居住形態（第四～八表）、学歴（第九表）、職業（過去と現在社会的活動第十～十五表）、生活保障（第一六～二〇表）、人間関係（第二二表）、子の扶養（第二三表）、友人（第二四、二五表）、余暇活動（第二九表）、信仰宗教（第三〇表）、社会意識―幸福感、その他（第三一、三二表）である。

各調査地域別およびトップクラスの被調査者の実数は添付のa―一頁の〝老人数、性、年齢（十歳階級）―地域別〟と題せられた表に示されてあるように総数九〇〇である。

東　京	四四一例
千　葉	二一〇例
名古屋	一五一例
四日市	九七例
トップクラス	三一例
総　数	九〇〇例

なお、住宅、商業、工業、団地各地域別、男女別、年齢階級別（一〇歳ごと）、被調査者の実数は、a―一頁の全表にくわしく明記せられているのでそれを参照して頂きたい。（註　紙数の都合により表の印刷は本号には省略する。）

V 調査の結果

つぎにそれぞれの項にわたり調査された結果について説明する。

1　健康（%の表一　東京、千葉、名古屋、四日市およびトップクラスの各実数表一―三）

a　健康状態は総体的にみて、普通のものが最も多い（四日市は例外）。健康度は年齢の高低に必ずしも比例せず、個人差が示された。つぎに強健なもの、病弱者および八〇歳以上の占める割合を、東京―老人クラブ出席の一般家庭老人と被保護老人―と、千葉―総体的な観測と農村地域老人と被保護老人―と、名古屋と四日市の各老人、およびトップクラスの各グループ別に比較対照すると、つぎのように表記せられる（表1a健康状態%）。

この表に示された数字をみて特に目に立つことは、

(1)　階層的にみて

(a)一般老人と被保護老人を比較していいうることは、被保護老人のうちで身体の強健なものは非常に少なく（東京三%、千葉二・六%）その大半は病弱者であること（東京五九%、千葉六三%）。これは東京、千葉ともに同様の結果が示された。

(b)トップクラスに病弱者が示されていないのは郵送した調査票がその病弱者から回収できなかった為である。

(2)　地域的に比較すること

(a)都市と農村地帯（千葉の大巌寺地区）の間に特に寿命の点で著しい差異が示された。東京では東京都第一表（I―一）に示されてあるように、七五歳～八〇歳のものが二二%、八〇歳以上が一六%であるが、これに対し千葉の農村地帯では七五歳～八〇歳は全然なく（0）、八〇歳以上が僅か七・二%（千葉市表一、農村の欄）である。数年まえ、自分が行なった埼玉県静村の調査においても示されたのであるが、農村老人は大体において七五歳が寿命の限界のようだ。七五歳頃までは割合に元気に働き、農作業にも体力に応じて従事するが、一度病気をすると、

表1a　健康状態（%）

	東京		千葉			名古屋	四日市	トップクラス
	一般	年保	総数	農村	生保			
強健	45%	3%	29%	27%	26%	14%	54%	19%
病弱	17	59	29	33	63	11	27	0
80才以上のしめる割合	16	10	9.5	7.2	16	14	13	23

日頃の過労が原因の一つであろうか。七五を過ぎた頃から多くの老人がポキッと大木が折れたように逝く。以前に自分で行った東京都墨田区の調査からも分ったことであるが、都市老人は細く長く、農村老人は太く短くの生き方をすることが、千葉のこの調査からも示唆されたように思われる。

(b)　東京と四日市に強健な老人が多く示されているのは、これらの地域では老人クラブ員を被調査者としたため、クラブに出席するものは健康なものが多いということを考慮に入れるべきである。調査対象者の中にクラブに参加せず、自宅に蟄居する老人も含まれたのであったなら病弱者の割合も増したであろう。

健康に関連した問題をみると、問題を持たないものは意外に多く（五八％）問題の中では「持病について悩む」ものが大半をしめしている。

医療費支払方法をみると、次の表2aに示されたように、トップクラス老人だけは公的な資源から払支われるものが三分の二を占めている（健保六四％、国保一〇％）。これに対し、一般老人は四つの調査地のいずれにおいても私的な財布から支払われるものが過半数を占めている。ことに家族が老人の医療費を支弁するものが半数近くもある（東京四九％、千葉三九％、名古屋四一％、四日市四五％）。また自分で負担している老人が一割～二割近くあることも、老人福祉のためにも配慮を要する問題である。病気の老人の医療費を家族が負担しなければならないものが、このようにまだ多数存在していることは、健康であってさえ厄介視され勝ちの老人が、どのように家族の上に重荷となり、嫌がられているか。そしてそれが実族員の老人に対する態度の上にどのように悪影響をもたらしているか。老人福祉のため公的資源から老人の医療費をもっと支弁できるような施策

表 2a　医療費支払方法（%）

		東京	千葉	名古屋	四日市	トップクラス
家族	私費	49	39	41	45	3
自費	私費	9.5	8	12	18	19
	私費	58.5%	47%	53%	63%	22%
健保	公的	10	15	13	2	64
国保	公的	18	21	30	34	10
	公的	28	36	43	36	74

表 3a　子の有無と同居別居老人世帯

	総数	東京	千葉	名古屋	四日市	トップクラス
総数	900 (100)	411例	210例	151例	97例	29例
子あり	811 (90)	372	184	138	97	20
子なし	72 (8)	26	24	13	0	9
子と同居	690 (76.6)	310	154	127	86	13
子と別居	151 (16.7)	62	30	11	11	7
老人だけの世帯	189 (21)	88	54	24	11	12

数字は実数　（　）内は%

を講ずべきだと思うのである。

2　住居、居住形態（%の表五a—2、調査地別実数の表六参照）

被調査者九〇〇例のうち、子のあるもの八一一例（九〇%）、子のないものは七二例（八%）、子と同居している老人は六九〇例（七六・六%）、別居のものは一五一例（一六・七%）、老人だけの世帯は一八九例（二一%）、子のあるもの八一一例を一〇〇として同居と別居の比率をみると、八五%が同居、一五%が別居である。

老人が若い世代から疎外させられる傾向のつよい昨今において、配偶者の存否は老人の生活にとって大きな問題である。特に子のないもの、子があっても子と別居する老人だけの世帯では、生活面でだけでなく、心理的にも老人夫婦が相互に依存しあう緊密度は強く大きい。

いま配偶者の有無を居住形態別に各調査地ごとに集計したものは添付の実数の表5にそれぞれ示されているが、そのうち子のない老人と老人だけの世帯を配偶者の有無別に、調査地ごとに示すとつぎの通りである。老人だけの世帯のうちで半数弱を占める単身者、ことに配偶者を失った老人は孤独の淋しさに空虚な毎日を送っていることであろう。特に淋しさを慰める社会的サービスが必要である。

3　学歴（%の表七、実数の表九調査地別）

東京、千葉、名古屋、四日市の被調査者（一般老人）の男女別学歴は総体的にみるとつぎに示すように、男は高等小学校が最も多く（四一%）、その次が小学校（三四%）、中学校が第三位で（一四%）、高等専門、大学出身のものも七・五%あり、学歴のないものは最も少なく、僅かに三・五%である。

これに対して女の学歴は小学校が最も多く（四五%）、第二位に高等小学校（二六%）、第三位が学歴なしで（一五%）、中学校（女学校）が第四位で（七%）、高等専門大学出身は僅か三%に過ぎない。

表 4a　配偶者の有無・居住形態別（実数）

		総数	東京	千葉	名古屋	四日市	プストラック
総数 900	夫婦	408	149	118	75	48	18
	単身	492	262	92	76	49	13
子なき老人 72	夫婦	20	8	6	3	0	3
	単身	52	18	18	10	0	6
子と別居する老人 127	夫婦	80	39	22	6	8	5
	単身	41	23	8	5	3	2
老人世帯 193	夫婦	100	47	28	9	8	8
	単身	93	41	26	15	3	8

調査地別にみると東京の老人の学歴が最も高く、男子は高等専門、大学出身が一四％を占め、千葉では高等専門、大学を出たものが一〇％を占めた。

トップクラスの老人は大学出身の学識経験者を有為抽出したもので一〇〇％大学出身者である。教養の程度、社会階層とともにこの学歴があとに述べる。老人の社会的活動、余暇活動に大きく関係をもっている。

4　職業（％の表九、実数の表一〇）

(イ)　現在就職して働いている老人といない老人についてみると一般老人（男）を総体的にみると四〇％が就職して居り、六〇％が働いていない。その四〇％の老人の現在の職業を大きく分けると、自営業が最も多く（二〇％）、第二位は雇用されて職に就いているもの（一三％）、農業はずっと少なく（五％）、その他（二％）である。これを調査地別に示せば添付の％の表九のとおりである。トップクラスの老人は六四％が就職している。そして大部分が教職の仕事をしている。

添付の表一〇には調査地別に実数で過去の職業、現在の職業、働きつづけたい意欲の有無が示してある。

(ロ)　現在の職業を継続したい意志の有無について、これを全体でみると、自営業者は九四％がつづけたい意志をもち、雇用者も九五％が仕事を続けたい意欲をもっている。農業については、地域別にみて差異があり千葉の農村地域では一〇〇％のものが農業をつづけたい意欲をもっているが、四日市では農業をしつづけたい老人は二五％に過ぎない（％の表九）。

(ハ)　現在働いていない男子老人の勤労意欲については総体的にみて、働きたい意欲をもつものは三八・五％で、あとの六一・五％は働きたくないと答えた。

調査地別内訳は添付の％の表一〇、および実数を示す。調査地別の表一一、一二に示されている。

働いていない老人が何故働き度いかその理由は調査地別に実数の表一一に年齢階層別に分類してそれぞれ示してある。

東京の場合をみると、

天気だから（一二％）

生活費が必要だから（六％）

小づかいが必要（三六％）
役にたちたいから（有用感）（三六％）
淋しさをまぎらすため（二七％）
独創力（〇・九％）

である。

表一一には働きたい理由が年齢階層別に分類されて示されているが七〇歳代の老人でも「元気だから働きたい」意欲をもつものが六十歳代のものより多く、二倍以上も多く示されている。

(ニ) 男子老人の働きたい期間は東京を例にとると表一一に示されてあるように、働けるだけ働きたいというものが最も多く（三三例中二六例）（七八％）、死ぬまで働きたいといったものが三三例中一例あった。

(ホ) 働きたくない理由としては東京を例にとると老齢だからというものも五六％、休養したいものが一八％、これらで大部分をしめ、生活に困らぬが世間ていのため、趣味を楽しみたい、その他が少しずつあげられた。東京以外の老人の述べた理由および年齢階層別の分類などくわしくは調査地別、表一一（実数）を参照されたい。

(ト) 老人が就いている社会的公職は民生委員、社会福祉議会委員、司法保護司、町内会役員、その他であることが示された。そしてその公職に就き、責任を果たしている老人の実数は調査地域別、年齢階層別に細分され、表一三に示されている通りである。

その割合を調査グループ別に百分比で示すと（％の表一一）、トップクラスの老人が目立って多く（四八％）、一般老人は総体的にみて平均値が一二％程度である。後者を調査地別にみると、東京が最も多く（一六％）、四日市が次ぎ（一二％）、千葉が第三位で（一一％）、名古屋の老人は第四位（一〇％）。男女別にみると、トップクラスでは男女の差異が少ない（男五〇％、女四七％）が、一般老人は男女の差異が顕著で、女子は公職に就いているものが各地域とも少ない（％の表一一参照）。

(ト) 老人の社会的活動につき、どのような種類の活動をしているかを見ると、実数の表一四に示されてあるように、共同募金、ボランティア活動、その他である。

社会的活動に従事している老人の割合を調査グループ別に比較すると、ここでも総体的にみると、一般老人（平均一七％）に比して、トップクラス老人の活躍が目立つ。一般老人を調査地別にみると、四日市老人が、トップクラスを抜いてもっともよく活躍している（四二％）。四日市では特に女子の活動が顕著である（男三〇％、女五一％）。四日市の被調査老人はすべて老人クラブの会員であることから、これは四日市の老人クラブが社会的活動を活潑に行なっているためであろう。

トップクラスでも女子の方が男子よりも活発に社会活動を行なっていることが示されているが（男二五％、女子四〇）、これと対照的に東京では男子が女子の三倍も活発に社会活動をしている（男二四％、女八％）。

各調査地域（東京、千葉、名古屋、四日市）で社会的活動をしている老人の実数は、表一四に、年齢層別に分類して示されているので参照されたい（表は次号）。

5　生活保障

(イ)　働いている男老人の家計負担の割合を一般老人でみると、総体的にみた生計担当者の平均値は四九％である。自分一人だけの生活費を稼ぐものの割合の平均値は三一％、家族にたよるものの割合の平均値は二〇％である。なおそれらの調査地域の割合は％の表一二に示された通りである。

(ロ)　生活収入源　生活費収入源についても一般老人とトップクラス老人は対照的である（％の表一四）。

(a)　稼働収入によるものは、トップクラス老人の場合六五％を占めているが、一般老人は、総体的にみた平均値が一七・五％である。

(b)　貯金、財産によるものは、トップクラスは一〇％であるが、一般老人の平均値は六・五％である。

(c)　これに対して子の扶養に依存する老人は、トップクラスでは六％という少なさであるが、一般老人の平均値は五〇％にも達している。配偶者の扶養に頼るものは、トップクラスも一般老人も余り差異はない（三％、二・五％）。また年金恩給によるものの割合も、両者にあまり差は見られなかった（六二八）。

なお地域別男女別老人の収入源の割合は表一四に示されているが、実数の表二〇には居住地域別にくわしく示されている。

(ハ)　生活保障安心感　現在の収入源に対して不安感をもつものの割合を総体的な平均値で示すと、一般老人は稼働収入によるものが一九％で

トップクラス老人は二五％、貯金、財産によるものは、トップクラスには無である。一般老人は一三％であるが、子の扶養によるものは一般老人の平均値一三％で、トップクラスは0である。配偶者扶養によるものは、一般老人は三七％が不安感をもつが、トップクラスには全然ない。これに対し、年金、恩給を収入源とするもので不安感をもつ一般老人は一八％あるが、トップクラスには五〇％もある。このように生活不安者の割合においても両者は対照的であることが示された。一般老人の調査地域別の割合は表一五（％）に示した。またそれぞれの調査地域別の実数も表二〇に示した。

6　老人の役割（家の中）（実数表二）

世帯主である老人は東京で四〇％、千葉で四八％、名古屋で四九％、四日市市四〇％でその平均値は四四％である。家事に関与しない一般老人が総体的にみた平均値で五二％―東京四一％、千葉四八％、名古屋五三％、四日市七六％―あるということは、それだけ余暇時間の増加を意味する。

7　人間関係

(イ)子の老親に対する態度（各実数表二二）（名古屋、千葉、東京、四日市）

子の老親に対する態度について、東京、千葉、名古屋、四日市とトップクラスの一般老人のうち、子のある老人八一一例、そのうち、回答したもの七七七例について検討する。いまこれを、東京、千葉、名古屋、四日市の一般老人と、トップクラス老人の二つのグループに分け敬愛・大切・無視・邪魔の四種類につき実数で分類し、比較対照したものがつぎの表5aである。すなわち、これをみると明らかであるか、子から最も敬愛される老人はトップクラスの老人でこれを一般老人と比較すると、六二対二〇の割合となる。一般老人のグループでは大切にされる割合が最も大きく（六七％）、トップクラス老人の三八％と対照させるとおもしろい。大切にするという言葉は「大事に愛する」という意味が含まれ、それに尊敬が加われば敬愛である。いづれにしてもトップクラスでは、親に対する表現される子の態度は、一〇〇％敬愛または大切にされ、子から無視されたり、邪魔にされたりするものは皆無である。一般老人では一〇％が無視され、三％が邪魔

表 5a　子の老人に対する態度（実数）

(四地域)　総数	東京	千葉	名古屋	四日市	トップクラス
総数　777 (100)	364	181	186	96	21 (100)
敬愛　160 (20)	62	29	30	39	13 (62)
大切　522 (67)	270	125	78	49	8 (38)
無視　76 (10)	22	22	25	7	
雅魔　19 (3)	10	5	3	1	

（　）内数字は％

扱いをうけている。その要因として考えられることは、(a)住居の状態が狭くて家族員のプライバシーを保つのに不備であること、(b)老人の経済力が乏しく、また公的資源からの生活保障も不備であるため、老人の扶養が子の家族に負担をかけていることも大きな要因の一つである。

トップクラスの老人が敬愛される理由として、老人自らが敬愛されるに充分な高度な教養を身につけていること、生活費で子に負担をかけていない。子の生活に不必要な干渉しない。住居が整っていて親子相互の間にプライバシーが守られていることなどが考えられる。これは老人自身が自分の幸福のために心得ておかなければならないし、また老人の福祉対策の基礎資料としても参考となるであろう。

(ロ) 友人（%の表一六、実数の表二四、各地域別）友人についても社会階層によって差異が見られた。

友人が一人もいない人は、東京、千葉、名古屋、四日市の調査対象者の中には平均して二三一見られたが、トップクラスは0である。

また友人の数についてみても、トップクラス老人の方が友人を数多くもっていることが示された。十五人以上友人をもっている老人はトップクラスでは八七%を占めているが、東京、千葉、名古屋、四日市の一般老人は二二%、一～四人の友人をもつものは前者は僅か三%であるが、後者は平均三〇%を占めていることが示された。

これに対し、何でも相談できる親友をもつ老人は、トップクラスの方が少ない。男女別にみると、トップクラスで男一三%に対し、東京、千葉、名古屋、四日市の老人の平均は十三%、女の場合は前者0に対し、後者の平均は三四%で両者の間に差異のあることが示された。

(ハ) 友人になった動機（実数表二五、各地域）

友人になった動機についても社会階層、地域によって差異があることが示された。

表6aに示されてあるように、東京、千葉、名古屋、四日市の老人は地縁的な動機によるものが最も多い（平均値三九・五%）のに対し、トップクラスでは同窓（四〇%）、職業（二六%）を通して友人になったものが最も多い。地縁的動機—近隣—にも地域差があり、最も多いものは千葉の六九%で東京

表 6a　友人になった動機

	東　京	千　葉	名古屋	四日市	トップクラス
総　数	528 (100)	193	98	46	58
近　隣	143 (27)	130 (69)	31 (32)	14 (30)	0
老人クラブ	214 (40)	20 (10)	1	3 (6.5)	0
職　業	54 (10)	13 (6)	28	3 (6.5)	15 (26)
同　窓	36 (6)	5	14 (14)	12 (26)	23 (40)
信　仰	18 (3)	6	11	2	5

数字は実数　（　）内は%

は二七%、トップクラスでは0。とくに東京で目に立つのは、老人クラブが友を得る機関として役立っていることである。東京で老人クラブが友人確保の動機となったものは四〇%示された。同じく老人クラブ員を対象とした四日市では、老人クラブが友人を得る動機となったものは六五%で、両者は対照的である。

(二) 問題を誰に相談するか（実数表二六、各地域）

老人が相談をする相手は、家族が最も多い。東京、千葉、名古屋、四日市の老人の平均値は七〇%である。トップクラスの老人にとっても同様、家族に相談するのが最も多い（五〇%）。しかし家族のない老人は誰が相談相手となっているか。友人に相談する老人はトップクラスでは可成ある（三八%）が、各地域老人で友人に相談するものは少ない（平均値五五%）。家族もなく、友人もない老人は誰に相談するのであろうか。神仏には四日市老人（一〇%）を除けば頼るものが少ない。福祉事務所（東京四六%、千葉六%）も民生委員も一般老人にとっては、相談機関となっていないようである。かくて何処へ相談すべきか、相手を知らない老人が東京に一七%、千葉に三%あることが示された。

次の表6bは老人の相談相手に関するものである。

8 老人クラブ（%表一八、実数表二八各地域）

(イ) 老人クラブに出席するのは中間階級の老人であって、トップクラスも最下層の被保護者もクラブには行かない。出席回数は大体月一回から三、四回位までが最も多く、東京だけはつぎの表にも示されてあるように頻繁に行くものもある。

(ロ) 老人クラブへ参加するようになった動機　人のすすめによるものが最も多い（平均値六五%）。つぎの表8bにも示されてあるように、地域により差異が大きく、

表6b 相談相手

	総数	東京	千葉	名古屋	四日市	トップクラス
	860 (100)	375 (100)	213 (100)	140 (100)	96 (100)	36 (100)
家既	593 (69)	279 (66)	157 (73)	100 (71)	69 (71)	18 (50)
友人・親友	69	34 (9)	10 (5)	8 (5)	3 (3)	14 (38)
神仏	16	2	0	2	10 (10)	2
民生委員	9	3	3	3	0	0
福祉事務所	32	17 (4.6)	13 (6)	2	0	0
老人クラブ	9	6	2	0	0	0
家庭奉任員	0	0	0	0	0	0
その他	108	64	28	—	11	2
なし	69	62 (17)	6 (3)	—	1	0

数字は実数　（ ）内数字は%

名古屋では八九％であるが、東京では三六％である。クラブに出席を継続させている理由を、東京の老人につき順位別に示すと、

他人の役に立ちたい　（一〇％）
暇である　（一七％）
気楽にしたい　（七・六％）
淋しさをまぎらすため　（六％）
知識を高めたい　（・％）
家族が邪魔にする　（〇・二％）

東京のほか、千葉、名古屋、四日市老人のクラブ参加の理由はつぎの表8bに示した。東京以外の地域での主な理由は、千葉老人の人のために役立ちたい（一四％）、と四日市老人の友がほしい（一〇％）といった理由である。

表 8a　寄合への出席者回数（実数）

	総数	東京	千葉	名古屋	四日市	トップクラス
出席するもの 1～4日	441	238	83	49	71	—
5～9日	67	59	2	1	5	—
10～19日	40	39	1	—	—	—
20日以上	23	22	1	—	—	—
出席しない	328	53	122	101	21	31
総数	899	411	209	151	97	31

表 8b　クラブ参加の動機

	東京	千葉	名古屋	四日市	トップクラス
	431	96	64	94	0
人のすすめ	159 (36)	62 (67)	57 (89)	66 (70)	—
淋しきをまぎらすため	28 (6)	3 (3)	—	5 (5)	—
友がほしい	29 (6.7)	1	1	10 (10)	—
暇である	75 (17)	3 (3)	1	7 (7)	—
家族が邪魔	—	—	—	—	—
気楽にしたい	33 (7.6)	2 (2)	—	—	—
知識を高める	15 (3.4)	2 (2)	1	3 (3)	—
人の役に立つ	45 (10)	13 (14)	3 (4)	2 (2)	—

地域別に比較したクラブ参加の動機理由の中にも、このように東京の老人が他の地域の老人よりも複雑な問題を蔵していることが示されている。

(ハ)　老人クラブで何をしているか　現に行っているクラブ活動の内容については、表8cのように、唄おどり、碁、将棋などのレクリエーション的なものと、歌、俳句作りといった趣味的な教養娯楽が主なものであった。

(ニ)　クラブ活動として会員が希望するもの（表8d）　希望意見を示したものは、東京と千葉の老人が主であるが表8dに示したように、娯楽、教育、社会奉仕のほか、内職のあっせん、相談相手といった社会福祉的な機能までを、老人クラブに期待している。

表 8c　クラブでしていること（実数）

	総　数	東　京	千　葉	名古屋	四日市
総　数	563	363	94	14	92
唄おどり	187	132	50	—	5
碁・将棋	50	42	3	—	5
茶・花	10	7	—	—	3
歌・俳句	32	27	2	—	3
書	7	5	1	—	1
手　芸	3	1	—	—	2
その他	272	149	38	12	73

表 8d　クラブでしてもらいたいこと

	東　京	千　葉	名古屋	四日市
特になし	15	76		1
旅行	4			
知識の交換		2		
海外旅行		1		
老人施設の拡充		1		
老人に理解あるような運動		1		
老人文学づくり		1		
内職のあっせん		1		
詩吟をうたう		1		
社会奉仕		1		
踊りをやりたい			1	
講師を招べ			1	
民主的にやる仕事	1			56
相談相手がほしい	1			
遊び道具がほしい	5			
謡をやりたい	7			
定期的に開催してほしい	7			
教養を高める	2			
その他	25			

また民主的運営を望む声が出されたことは、会長のワンマン的なやり方を批判したものかとも受取れる。定期的に開催してほしいという意見の裏にも、クラブの開催日が不規則で、会員がしびれを切らして待っている様子がうかがえるのである。

9　生活時間（%の表二一、二二、実数の表二九）

(イ)　起床時間は六時から七時までの間が最も多く（平均値三六%）、つぎが六時以前で平均二八・五%、七時から八時までの間に起きるものは二五%、八時以後のものは九・五%示された。

(ロ)　就寝時間は九時から一〇時までに就寝するものが最も多く（二九%）、つぎが一〇時～一二時までの間（二八%）、九時以前は二四%、一一時以後就寝する老人もかなり（一七・六%）あり、個人差のあることが示された。

老人は早寝早起きが通例のように思われてきたし、また以前はそうであったが、最近はテレビ、ラジオなどで夜更しをする老人も増えてきた

ようである。就寝時間が遅ければ起床時間も遅くなり、これまでの老人の生活時間の枠組みが当てはまらなくなった。起床、就寝時間の上で老若世代間の差異が縮められたことが、この調査で示された。なお、この結果は労研が別途に行った調査の結果とも符合する。

10　余暇時間（％の表二三、実数表二九）

(イ)　どの位余暇時間をもっているか　この調査で、終日自由で暇な老人が平均四七％あり、半日が暇なものは二三％あった。二、三時間は暇のあるものは一六％あるが、殆んど暇の無い忙しい老人も一〇％あることが示された。

東京、千葉、名古屋、四日市の各地域別男女別の内訳は％の表二三と実数の表二九にそれぞれ示されている。

(ロ)　余暇に何をするか　活動の主なものを示すと（％の表二三―b、実数の表二九）に示したように、テレビが最も多く（平均二八％）、読書（一三％）、針仕事（八・五％）、庭いじり（七％）、ラジオ（六％）、散歩（四％）、老人クラブ（三％）、友人訪問（三％）、寺神社まいり（三％）などである。（　）内に示した数字は東京、千葉、名古屋、四日市の老人の余暇活動の割合の平均値であるが、それとトップクラス老人の余暇活動を対照すると、ここも差異がみられた。

トップクラス老人は読書に時間を過すことが最も多い（二〇％）が、一般老人は（一三％）。つぎが庭いじり（一七％）で、テレビはトップクラスは一般老人（二八％）ほど時間を費さない。友人訪問もトップクラス老人は一般老人（三％）よりも多く時間を費す（六％）ことが示された。

(ハ)　趣　味（％の表二四、実数の表二九）

趣味では一般老人の最高は園芸（一九％）、つぎが読書で一二％、それにつづくものを示すと、釣り猟（五・五％）、動物飼育（四％）、謡曲、長唄（三％）、手芸（二％）、その他である。

これをトップクラス老人の趣味と対照させると、差異がみられる。トップクラスでは読書が最高（五六％）を示し、つぎに園芸（二二％）、謡曲、長唄（九％）、歌・俳句（四％）がこれにつづいた。

なお、趣味をもたない老人はトップクラスでは四％であるが、一般老人の中には一六％示された。

11　信仰する宗教（％の表二五、実数の表三〇）

信仰をもつものともたないものについて、東京、千葉、名古屋、四日市の一般老人とトップクラス老人を比較すると、ここにも両者の間に差

異が示された。すなわち、信仰をもつ老人は一般老人は六六%であるが、トップクラス老人は七四%を示し、一般老人よりも多く、信仰のないものは、一般老人の方に多い（四一%対二六%）ことが示された。

宗旨別にみると、一般老人は大半（五〇%）が仏教信仰者であり、キリスト教徒は、東京老人の四%だけが信仰しているのに対し、トップクラス老人の中にはキリスト教の信者が最も多く（三二%）、仏教信者が少ないことが示された。

12　社会意識

(イ)　幸福な時期（%の表二六、実数の表三一）

「あなたの人生は幸福であったと思うか」の質問に対し、幸福であったと答えたものは、東京、千葉、名古屋、四日市の一般老人の平均値が七二%、幸福でなかったと答えたものは二八%であった。これに対し、トップクラス老人は幸福であった者が九〇%を示し、トップクラス老人の方がより多く幸福な人生を過したことが示された。

「幸福であった人生のどの時期が最も幸福であったか」の答を分類すると、その割合は、東京、千葉、名古屋、四日市の平均値で示すと表9の通りである。

表9　幸福な時期

	四地域一般老人	トップクラス老人
児童期が最も幸福と答えたもの	3%	0
青年期　〃	9.5%	31%
壮年期　〃	23%	38%
老年期　〃	36%	15%

これをトップクラス老人と対照すると、児童期と答えたものはトップクラスには無く、青年期が三一%、壮年期が三八%、老年期が一五%示された。また一般老人は三六%のものが現在を最も幸福と答えたのに対し、トップクラスでは最も多くのものが壮年期を幸福であったと答えた。この点においても両グループの間に差異がみられた。

(ロ)　幸福の必要条件　幸福であるためには何が最も必要かという問に対し、回収された答を分析するとつぎのような数字が示された。

すなわち、幸福の最大条件を健康とする者は六一・五%。愛情とするもの一〇・五%。誠実とみるもの七%。心理的な要素一七・五%。お金と経済的な要素を重くみるものは一一%であった。

これをトップクラス老人の答と対照すると、トップクラス老人のうち、幸福の要件を健康とみるものは三六%、愛情とみるもの一〇%、誠実が最も大切だとみるものは二九%、そしてお金（経済的な要件）を重要視するものは

一二%を示した。

このように、一般老人は健康を最も重要視したのに対し、トップクラスの老人は、健康と心理的要件（愛情、誠実計三四%）とを同じ位の割合で重要視した。そして経済的なお金は一般老人と同様あまり重要視していないことが示された。

(ハ)「この世の中で何を最も尊しとするか」（%の表二八、実数表三二）の問に対しても、その答は、表10に示すように、まごころを最も尊しとした。この点では一般老人（四二%）、トップクラス（六三%）ともに同様に考えていることが示された。

表10　最も尊いもの

最も尊いもの	東京・千葉・名古屋・四日市の平均値（%）	トップクラス（%）
仏	6%	22%
神	15.5%	6%
金	15%	3%
まごころ	42%	63%
その他	21.5%	6%

(ニ)　老人の扶養（%の表二九、実数の表三二）

「老人の扶養は誰が責任をとるべきだと思うか」の問に対する答を一般老人とトップクラス老人とを比較して示すと、子供だと答えた老人の割合は、東京、千葉、名古屋、四日市の一般老人の中では六六%（平均値）示されたのに対し、トップクラス老人では一九%示された。

老人扶養の責任者は国であると、社会保障の必要性を考えているものは、一般老人の中には僅か一七%しか示されなかったのに対し、トップクラスでは三五%が国の責任と考えている。さらに老後の生活は老人自身の責任であり、自分自身でまかなうべきだと見るものは、一般老人には一七%あったが、トップクラスには三二%あることが示された。

(ホ)　敬老の日について（%の表三〇、実数の表三二）

最後に「敬老の日を知っているか否か」について質問したところ、「知っている」と答えたものが、一般老人の中に七四%（平均値）あった。

以上本文に示した数字は男女の合計の数である。男女別、地域別の数字は添付の表（実数と%）にくわしく示されている。

第二　外国の老人がどのような社会的活動をなし、またどのように余暇を過し、自由時間を活用しているか。

余暇（Leisure, Free hours）という語の意味は一日のうちで「労働と睡眠の目的以外の各種の文化、娯楽、レクレエーション活動（余暇活

動)」に利用される時間で、もともと文化創造に利用される時間を指すといわれる。

古代ギリシァでは、彫刻家や画家などは'Leisured men'とされた。またわが国でも、古くから詩歌や物語りなど、すぐれた文学の創作は、閑のある大宮人やいんきょ者によってつくられたものが多い。

ところが今日では、社会の大部分を占める働く人たちにとって、労働が一日のうちで長い時間をとり、はげしい負担となっている。これらの人たちにとっては、残された僅かの時間は明日の労働のために、今日働いて消耗したエネルギーを回復し再生産するために、睡眠と休息と生理的、心理的な緊張を解消させるため、慰安的な、娯楽本位の余暇活動に使われる傾向をもっている。経済水準の低いものほど余暇は少なく、経済水準と余暇の量は相関関係にあるといわれる。

然しながら一方最近高度の経済成長にともない生産性向上のための技術革新によってもたらされた労働時間の短縮は、一週四十時間制の採用を促しさらにそれ以上にさえ短縮されようとしており、働く人の余暇—仕事に拘束されない自由な時間—を益々増大させてきている。

ことに老人の場合、健康長寿科学のおかげで寿命の延びた中高年者にとって、停年退職したあと、これといってする仕事もない長い歳月を、如何にして有意義に過させるかということは、先進国では一つの大きな研究課題となっている。

(イ) 老人にとって好ましい余暇活動とは何か　老人に好かれる余暇活動についてシカゴ大学のハビガースト(Robert J. Havighurst)教授が行なった研究の報告によると、つぎの一一種目が老人にとって好ましい余暇活動である。

1 クラブ(老人クラブ)や互助団体、教会の仲間との討論、研究会、成人学級など社会集団に参加すること。
2 近隣集団や旅行会、その他趣味や遊び仲間といった任意の集団やグループ活動に参加すること。
3 娯楽、慰安旅行。
4 スポーツのチームに入って運動競技をやる。
5 テニス、野球、フットボールなど、運動競技を見物する。
6 テレビ、ラジオの視聴。
7 魚釣や猟に出かける。

8　園芸、花壇、野菜づくり、盆景づくり。
9　女子は手芸、裁縫、手工など。男子は日曜大工、家の修理、木工など。
10　読書（音楽、美術鑑賞を含む）
11　親族友人を訪問する。

なお、テレビは、一般老人の余暇活動の最も大きな部分をしめているものの一つであることが今回のわれわれの調査からも示されたことであるが、米国でもテレビは一般老人の娯楽として類似の効用を示していることがつぎの資料から知らされる。

しかし、筆者がアメリカに滞在したとき経験したところでは、上流階層（Upper-Upper, Upper-Middle Class）の家庭ではテレビをもっていない。その理由をきくと子女の教育上好ましくないということをきかされた。ニュースその他はラジオで聴取していた。

テレビが余暇に利用きれた時間数

余暇時間テレビを視た時間	3時間以内	3～4.9時間	5時間以上
全部またはほとんど全部	13%	19%	30%
約 1/2	27	33	37
ごく小部分	60	48	33
計	100%	100%	100%
人数	169	157	130

資料　Geiger and Sokol, 1957. Table 2.5 The Educational Televisicen and Radia Center, Ann Arbor Michigan, R. W. Kleemeier (ed) Aging and Leisure, p. 267 Table 9.8 より

第三　有意義な価値ある社会的活動とは、また有意義な余暇利用とは如何なるものか

狩猟にあけくれ、魚撈や遊牧の生活をしていた単純な未開社会では、食糧を探し求めて歩くことと、住居や衣服をつくりととのえることのために、一日の時間の大部分が費消され、余った僅かな時間だけが子供の養育、血縁や親族、仲間との交際、宗教に関した儀礼などに使われる。幸い温暖で、地味が肥え、水も豊かであれば、そこでの生活は寒い極地の地や熱帯の砂漠での生活よりはよほど楽で、それだけ時間に余裕ができる。

これに対し、今日われわれが生活する複雑な機構の現代の社会では、如何にすれば最も有効に限られた時間を活用できるかということが一つの課題となっている。そして、その住民が時間の尊さを自ら悟りどの程度時間の使い方を問題としているか、その度合が、その社会の文明開化の程度を測定する一つの指標であるとハビガースト教授はいっている。

何か有意義であり、何が最も価値があるかという問題は、国により、社会により、文化によってが差異があり同一ではない。

ギリシャ・ローマ文化に源をもつ西洋の中世の伝統によると、人間が生きるために消費するもの（食糧など）を生産するための労働（農業）は最も低く評価せられた。つぎにくり返し使用されるもの、たとえば道具、器具、書籍、武器などを製造する工業は、食糧をつくるための農業労働より高く評価せられた。

最も尊いものとして最高の価値をおいた時間の使い方は、人間を対象とする仕事、たとえば政治、宗教上の儀礼を司る司祭など、人民のために奉仕する仕事に従事することであった。しかし、東洋の伝統によると食糧を生産する農業は、商業や工業よりも一段と高く評価せられたり、西洋人の価値体系とはいちじるしく異っている。

働くことに貴賤をおかず労働することそのものを等しく尊重する今日の進歩的な社会思想の下では、このような伝統にもとづく価値評論の基準はくずれ去ろうとしている。

今日ますます増大しつつある老人の余暇―自由な時間―をどのようにして、有意義にさせるように指導すべきかは一つの研究課題である。老人の余暇活動が有意義であるか否か如何なる余暇活動をすれば価値があり、有意義であるか。その評価の基準を定める指標として、ハビガースト教授はつぎの八項目をつくった。

老人の余暇活動の有意義性を評価する基準としてハビガースト教授が作った指標

(一) 慰安娯楽的な（心理的）効果―その活動がそれを行う人にとって楽しいもの（快楽）であったかどうか心理的効果の有無。

(二) 生理的心理的な緊張をやわらげ、疲労回復に効果があるか否か。仕事の重圧から気分転換をさせ爽快な気分にさせるものであるかどうか。

(三) 社会的効果―友人に接し、友人をつくる機縁となりうるようなものであること。

(四) 教育的効果―新しい経験を得させ、また新しい知識をそれから学び得るものであるかどうか。

(五) 鞭撻激励する心理的効果、それをする人に「完成」「成しとげさせる」よう力づけるものであるか否か、意気の消沈したものを勇気づける。

(六) 創作意欲をもりたて独創性を伸ばすものであること―その創作活動をする者が、自分の自主的な創意工夫によって新しい製作をなしとげたとき、その喜びは、その人に自己の価値を再認識させ、それが生甲斐感をもたせるようになる。これによって自己を卑下し、劣等感にさいなまれた人間を、力づけ明るい希望をもって生きるようにさせる。

(七) 社会を益するものであること―世の中のため、他人のためになる社会奉仕的な活動。

(八) その活動をしていると、時間のたつのも忘れ熱中できるだけでなく、またよろこんですることができるようなものであること。

わが国では老人の社会的活動を指導し鞭撻する一つの機関として、老人クラブを活用すればよいと思う。

わが国での老人クラブ活動の内容は、こんにち必ずしも完全なものではないが、今後指導の如何によっては、老人の社会的、精神的な福祉のために役立てることができると思う。東京、千葉、名古屋、四日市のクラブの活動状況は本文に示したが、アメリカとカナダのクラブ活動をつぎに紹介することとする。

「老人クラブ活動のうち、クラブ員は何を最も喜ぶか?」についてアメリカとカナダで調査が試みられた。その結果を紹介しよう。

アメリカの調査（インディアナ州、フォート・ウエイン市の老人福祉センター（Fort Wcyne, Indiana Community Center Service for the Elderly）が行なったもの）によると、喜ばれているクラブ活動は順位別に示すとつぎの通りである。

(1)手工業、(2)音楽、(3)ダンス（特にスクエアーダンス）、(4)趣味、(5)自然研究、(6)劇、(7)社会集会（お茶の会等）、(8)クラブ、(9)学級、(10)スポーツ（ホースシュー、クロッケー、シャフルボードなど、我国なら球つき、輪なげ、ピンポンといった軽いスポーツ）、(10)静かなゲーム（碁、将棋）。

カナダの調査は、トロント大学社会福祉学部が個別面接法で調査したものである。トロント市にある老人クラブ員男女五〇名の興味あるクラブ活動と、順位別に示すとつぎの通りである。

(1)旅行　九二%、(2)ピクニック漫歩　九〇%、(3)音楽　九〇%、(4)ゲーム　八八%、(5)クラブ員による慰問　八四%、(6)社交集会（お茶の会）八二%、(7)外部からの慰問　八〇%、(8)設計、企画によるプロジェクト　七八%、(9)カード遊び（トランプ等）六八%、(10)食事を御馳走になる事　六四%、(11)教養を高める学級に出席　五四%、(12)事務的な会合　四四%、(13)ダンス　四〇%、(14)手工芸　三四%、(15)その他　三二%。

註 University of Toronto, School of Social Work, Field Survey Report。。。

アメリカとカナダを比較して対照的である点の一つは手工芸がアメリカでは第一位であるのに対し、カナダでは低位であることである。

アメリカでのクラブ活動は、最初は淋しさを慰めるための集会であったが、最近では手芸や絵画彫刻など、創作活動を通し、クラブ員の創作

意欲を満足させることによって、それぞれのもつ内面的な苦悩を療治しようとするテラピー的なものに変ってきた。これはアメリカでは早くから機械の使用が普及し、一般の生活水準が高められ生活時間に余裕があったため、中階層以上のひとは若いときから趣味をもち、趣味を楽しむ機会にめぐまれていた事実が背景になっている。

これに対しカナダの場合は、機械化がおくれ生活に余裕がない。壮年時代には未開拓地で毎日十時間から十四時間も働き通したカナダの老人には、自分の趣味をもち趣味を楽しむ余裕をもつものが少い。この事実が右の調査の結果となって表われたものであろう。

わが国の一般老人はこの二つのうち、カナダの老人に近いものではなかろうか。現在、老人クラブに集まる老人の多くは、やはり若い日に営々として働き通して趣味をもつ余裕のなかった人が少なくないと思われるのである。このような人たちのために絵を描き彫刻をする学級を作ったところで永つづきしないであうう。しかし、わが国の老人が日常の生活に使い、よろこんで利用することのできるようなもの—たとえばレース編みの袋をつくること、廃物利用で下駄の鼻緒や人形づくりなど—を通して、クラブ員に創意工夫をさせ、老人の創作意欲をかき立てて、会員の間で競争もさせ、楽しさを味わせることもできる。そしてその楽しさが不平不満を忘れさせる療法となることもありうるであろう。知的向上のための講演や講話はプログラムの中に是非入れて欲しいものである。老人も時代におくれてはならない。若い世代と話題を合わせ、時代に適応させるためにも必要である。

わが国の老人クラブでは、大抵のところで踊りが盛んである。が、踊りのできない人、嫌いな老人も少なくない。その人たちのために、別のクラブ活動が並行できるように間仕りをし、あるいは別の部屋を設けることが大切だと思う。

一般的なクラブ活動としては、成べく多くの会員に共通した興味のある問題について学習できるようにすれば、クラブ員の数は減らないであろう。問題としては、たとえば、健康の問題、生活水準を向上させる問題、社会福祉、老令年金の問題、クラブ員よりもっと生活に困った人たちのあること、住居の問題、時代に適応し家族員と円満に生活するような心構えの問題などがあげられる。いま、一つ提言したいことは、老人クラブで会員に「役割」をもたせることである。職場からは定年でしめ出され、同居している子の家では疎外され、家の中で何もさせてもらえない。こんな老人に対してクラブ活動の一つとして何か役割をもたせるようにすれば、それがどんなに生甲斐感をもたせるようになるであろうか。例えば十月の共同募金の際には、二人一組で箱をもたせて共同募金に協力させる。共募委員会からの謝礼はクラブに寄付させる。身体障害

者や孤児の施設には、元気な老人が慰問にゆく。クラブ員の手づくりの、心のこもった贈物を――折りづるでもよい――プレゼントする。

先方、からよろこび感謝されれば、その老人は自分はまだ世の中のためになることのできる人間であるという自信をもち、それが有用感をもたせ、自己卑下や劣等感を解消する。その上与える喜びからくる満足感は、これらの老人にどんなに生甲斐を感じさせることになるであろう。

わが国の老人クラはブ創設以来十数年を経て、レクリエーション的なものから社会教育的なもの、社会奉仕的なものへと発展させるべき時点に来ている。戦後のわが国は、すべて「家」を中心とした考え方がつよく、その家の中には老人の座がおのずから定まってきた。そしてそれはわが国民道徳のうちになおかなり安定した状態にあった。終戦後、日本の家族制度が破壊せられるとともに、この老人の座もくずれおちてしまった。そして新しい日本の民主主義に相応した新しい老人の座というものがなお見出しかねて、いわば暗中模索の時代にある。今日の社会において合理的な老人の座を定め、それを国民一般に普及し、それを国民の常識通念のうちにとけこませることは、非常に困難なことであるが、それは一日も早くなしとげられなければならないことである。それはただに老人のためばかりでなく、国民全体のために必要である。そのためには諸種の試みと努力が必要であるが、老人クラブを利用して、老若両世代が和合し相互に信頼しあえるよう老人の側にも再教育をすることが必要ではないであろうか。

六万もそれ以上も組織され、数の上だけで世界を制覇する、老人クラブでない。内容のもっと充実した、日本の土地に根をおろした肉のある老人クラブが日本のモラル再建のためにも育成せられてゆくことを祈るものである。

あとがき

これは四十二年度厚生科学研究として、厚生省から資金助成依嘱をうけて行った研究調査の報告である。このうち第一の実態調査についてはつぎの諸兄姉の協力を得たことをここに感謝する。

東京都　福田よし子、林千代の諸姉および東洋大学の学生数名と全社協の三上甚祐氏

千葉市　淑徳大学今岡健一郎教授夫妻、山本禄瑞総務課長および学生数名

名古屋市　同朋大学学生数名

四日市市　同朋大学学生